

『チベット仏教哲学』<sup>①</sup>

高田順仁

中観帰謬派の根本的学説とは何かという問いを、ツォンカパ(1357-1419)に求めるならば、たとえば『道次第大論』における、

自体 (tan gi no bo) によって成立している自性が微塵ほども無いものにおいて、所生と能生、否定と肯定等の輪廻と涅槃の設定すべてが主張されるに足ることが中観派の勝法である<sup>①</sup>。

という記述がその答えとして得られる。さらにその根本的学説に依る、したがって派生的な学説として、主なる八つがあることも知られる。すなわち『密意解明』には次のようにある。

聖者(「ナーガルジュナ」)のテキストを註釈する仕方において、(a) 自相によって成立しているもの (tan gi no bo) (b) mshan rid kyi grub pa) は微塵ほども無いけれども、(b) あらゆる所作・能作が設定されるに足る、という不共なこの註釈の仕方の宗(「帰謬派の宗」)に依存して、他の註釈者と共有しない正しい学説が多くある。それは何かといえ

ば、ひとまず「以下」主要なものを述べれば、(i) 六識身と体を異にするアーラヤ識「を否定する不共な仕方」と、(ii) 自己認識を否定する不共な仕方と、(iii) 自立論証によって対論者の「心」相続に真実の見を起こすことを承認しないこととの三つ、そして(iv) 知識 (ss pa) を承認することと同様に外境をも承認する必要があること、(v) 声聞・独覚に事物が無自性であるとの証悟があること、(vi) 法我執が煩惱であると設定すること、(vii) 滅したものの (shing rdo) は事物(「有為」)であること、(viii) それ(「二三」)を理由として、三世を設定する不共な仕方、等である。

二

本書『チベット仏教哲学』の目的は、チベット仏教哲学の最高峰と見られるツォンカパの中観思想、すなわち「空」の思想を説明することであり、本書の意義は、著者にして、はじめてツォンカパの思想的本質は「離辺中観説」批判を通してのみ明らかにされるという方法が取られたということである。本書では第四章以下第十章までにおいて、ツォンカパの中観思想に関する考察が行われる。本書評はその六章の内容、その中でも直接ツォンカパの思想に関することのみを扱う。

まず、第四章 ツォンカパの中観思想についてでは、ツォンカパ批判を含む文献として、サキヤ派のコラムパ(1429-89)の『見解弁別』、同じくシャーキヤチョクデン(1428-1507)の『中観決択』があり、その前者における前主張の記述部分か

ら、十項目の学説が批判されるべきツォンカバの学説として取り出され、それぞれが『道次第大論』、『善説心髓』、『密意解明』、および、チャンドラキールティの『入中論註』、『四百論釈』にトレースされる。

その十項目の学説(A-J)を、評者の判断で、内容分類し、先の『密意解明』における帰謬派の根本的学説、および主要な八つの学説との対応を示せば次のようになる。

二諦説に関するもの(A, B, C)≠a, b  
煩惱障・所知障に関するもの(D=vi, E)  
二乗にも法無我の証悟が有るとするもの(F=iv)  
滅したものは事物であるとするもの(G=vii)  
唯識説批判に関するもの(H=i, I=ii)  
自立論証批判に関わるもの(J=iii)

このうち本書では、学説A、B、C、Jに対する考察が示されている。なお[A, B, C]≠a, bとしたのは、学説B、Cが、それぞれ自立派、帰謬派の言説有に関するものであり、学説Aが勝義諦に関する記述であるということにおいて、それぞれb, aに対応するという認識を示したまでのものである。

まず学説Bが、チャンドラキールティやツォンカバに先行する学者の著作には見出されないとの見地により、著者によって、はじめてツォンカバ独自の学説とみなされるに至ったものであることは周知の事実である。自立派は、「言説において、自相

によって成立しているものを認める」とする学説Bは、既に『道次第大論』に見られ、ツォンカバが帰謬派と自立派の相違を、単なる空性論証の方法の相違と見ずに、それぞれの言説有の規定の相違に求めるという考え方を指している。

学説Cは帰謬派の言説有に関するものであるが、「名の言説の力のみによって設定されたもの」(miñ gi tha stad kyi dbai tsam gyis bshag pa, GR)<sup>⑤</sup>、「分別の力によって設定されたもののみ」(trog pañi dbai gyis bshag pa tsam, GR)を指す学説Cそのものは『道次第大論』には全く見られない。学説Cは、学説Bとともに、第七章 ツォンカバにおける言説有の設定において詳説される。そこでは、「諸の感官知に色声等の五境は、自相として顕現する」(U<sup>R</sup>)<sup>⑥</sup>との学説、したがって、「言説においても迷乱である」(U<sup>R</sup>)<sup>⑥</sup>諸の感官知は「自相に対して量ではない」(U<sup>R</sup>)<sup>⑥</sup>が、「言説において色声等の諸境を設定する量として不適切であることはない」(U<sup>R</sup>)<sup>⑥</sup>、すなわち色等は「量によって成立していること」(tshad nas grub pa, LR)との学説を含め、「諸の感官知に色声等の五境は、自相として顕現する」との理解が、自立派の言説有が「それにとっての境を有する慧の顕現の力によって設定されたもの」(ran gi yul can gyi blohi snan bali dbai gyis ... bshag pa, LN)<sup>⑦</sup>と規定されることによって、学説Bの理論的根拠となることが指摘される。

自立論証の用・不用を自立派・帰謬派の言説有理解の相違に求めるとされる学説J (U<sup>N</sup>)<sup>⑧</sup>も、学説Bに基づくという意味

において、ツォンカバに独自の主張である。この問題は、第八章 ツォンカバの自立論証批判にて詳説され、ここでは、『道次第大論』と『善説心髓』における自立論証批判の力点の相違、すなわち、「量の一致顕現」があり得ないという主張から「言説無自相」への推移が指摘されている。

学説Aは、ツォンカバが絶対否定たる空性 (ston pa tñid med drag) を勝義諦であるとする<sup>⑮</sup>こと、あるいは「自性を排除するのみのもの (ran bshin nam par bcaod pa tsam) (＝絶対否定)」によって、その対象をどうして否定する必要があるのか。(中略) そのような分別さえも過失であるとして、善い分別 (bzau tog) と悪い分別 (ran tog) のいずれをも否定するならば、中国の戒師和尚の教義を樹立したいと願っていることは明白である<sup>⑯</sup> (LD) という主張を指している。このうち後者は、ツォンカバ自身であれば「否定対象の確認が過大なる」「他宗」の批判「における総括として示されたものであるが、第九章 ツォンカバ哲学の根本的立場では、学説Aが「離辺中観説」批判と他ならないことが明らかにされる。

勝義諦を「有・無 (yod med) と、である・でない (yid min) 等の一切の辺を離れ」(『見解弁別』) たものと説く「離辺中観説」に共通する見方として、中観派 (または帰謬派) に「言説においても、主張は無い」(LD)、「自宗は何も無い」(LD) という考え方が指摘される。第十章 ツォンカバと離辺中観説では、ツォンカバにおける相対否定と絶対否定との二種否定に対する考察を踏まえた上で、中観派における有主

張説が詳説される。

ツォンカバの思想を批判した最も初期の学者の一人に、サキヤ派のタクツァンパ (1405-) がいる。彼は『学説全知』において、ツォンカバに対して、十八の矛盾の重荷 (gag tsal khur chan bo hgyad) を指摘した。第五章 タクツァンパのツォンカバ批判では、タクツァンパは、ツォンカバの、色等は「量によって成立している」という言説有に関する主張を「自立し得るもの」(tshugs thub) と解して批判したことが指摘されている。

以上、簡単に学説A、B、C、Jを用いて、本書第四章から第十章までの内容を概観した。

### 三

次いで評者の責務として、多少なりとも本書に対する論評を加えておかねばならない。

まず「離辺中観説」についてである。「離辺中観説」では、勝義諦は「有・無と、である・でない等の一切の辺を離れ」たものであると主張される。一方ツォンカバは勝義諦を、絶対否定たる空性と主張するとともに、空性を「無分別・無戲論」と規定する中観派の伝統をも承継している。したがって、ここで大切なのは「離辺中観説」による勝義諦理解を「不可説の实在の肯定」と断罪することのみに留まることなく、「無分別・無戲論」との規定をいかに考えるかということではないだろうか。「不可説・無戲論」に対するツォンカバの考え方について

は、『密意解明』等の記述を参照されたい。<sup>③④</sup>

またツォンカバが勝義諦であるとする絶対否定たる空性を、コランバが世俗であると反論したことに関連して、「それ（＝生起等の否定）も、道理によつて考察するならば、世俗に他ならない」とのジュニャーナガルバ（『二諦分別論』）の説が指摘されるが、少なくとも、ツォンカバの理解であれば、「勝義として生起すること等の否定は世俗なるものであると説明することとは、世俗として有るという意味であつて、世俗であると説いているのではない」と解釈されることも読者には知っておいていただきたい。

次いで二種の否定、とくに絶対否定についてである。本書によつて絶対否定の觀念は、否定対象、否定対象の否定、他の法という三項よりなり、否定対象と他の法との二つはともに否定しうる、との指摘はきわめて有益である。ツォンカバ自身も次のように述べている。

否定対象を直接に排除することで理解されるべき意味に二つがあり、そのうち、相対否定（*ma yin dgag*）とは、否定対象を直接に排除してから、他の法を投じないものである。……『思摂炎』……絶対否定（*med dgag*）とは、否定対象を直接に排除してから、他の法を投じないものである。……『思摂炎』における「証明する（*sgrub*）」、「証明しない（*mi sgrub*）」とは、投じる（*lphen*）」、「投じない（*mi lphen*）」と同義であり、それとは異なつたもの（*de las gshan pa*＝他の法）とは、否定対象の否定のみ（*dgag bya bkag tsam*）[や意味

するの]ではないのである。

ここでは、とくに絶対否定であれば、他の法を投じないが、否定対象の否定のみ、言い換えれば、自性の否定のみ（*tab bhin dgag tsam*）が所証（*bsgrub bya*）であるとの理解が示されていることに注意されたい。

絶対否定は、相対否定と異なつて、排中律を前提としない否定であるとするのが一般的であるが、ツォンカバにあつては、絶対否定であつても排中律に従つていと解すべきことは、本書の指摘する通りであらう。<sup>⑤⑥</sup>では、何故ツォンカバは、絶対否定に対して、このような見解を有しえたのであらうか。このような見解は、「自性を排除することによつて、その対象をどうして否定する必要があるか」（『尸前掲』）という主張と意を一にするものであることは指摘するまでもないが、そしてツォンカバ自身は、必ずしもそのように説明しているのではないが、絶対否定とは、第一義的には、自性を否定対象とするという認識において、はじめて提示可能な見解であると考えられるのではないであらうか。

本書では直接扱われないが、著者は如来藏思想、および密教に對して否定的な見解を有される論者として知られている。<sup>⑦⑧</sup>しかし読者は、決して、ツォンカバにあつても、如来藏思想、密教による行は否定されると誤解されてはならない。たとえば密教に對しては、『道次第大論』の末尾にその実践に入ることが促され、タントラ、とくに、まさにこの生において（*thaiwa janmani*）、速やかに佛位を得ようとする無上瑜伽タントラの

所化には、一般の大乗、すなわち波羅蜜多乗の所化以上に、強い悲が必要であると解しうる記述も認められる。<sup>③</sup>

如来蔵思想について、ツォンカパ自身、如来蔵説に言及した記述はそれほど多くはないようであるが、「勝者によってお説きになられた限りの、空性を説示する経、それらすべては煩惱を払い除けるものであって、この界 (dhanu) を害なうものではない」(『讀法界頌』) とにおける「界」を「諦執の対象である、二我が否定された本性清浄な界、[すなわち] 空性」と解した上で、「如来性 (de bshin gsegs pañi kham) = 如来蔵」は無いと教示するものではない」との記述が重要である。<sup>④</sup>

#### 四

評者は、もちろんのこと本書評を草するにあたって、その締め切りを気に掛けながらも、繰り返し本書を読み、本書を正しく理解することに努めようとした。しかし評者が上記で述べ得たことはわずかばかりのものである。評者は本書を通して、上記以上に多くを学び獲た。随時機会をとらえて、評者等のツォンカパ研究に活かしていきたい。いまは次の二つが、評者が本書を通して獲得し得た最大の恩恵であったことを記して、この書評を終えることにする。

佛教思想とは何かという問いを、哲学的に追求するにあたっては、とくに二諦説が考察の中心とされるべきであること、そして、ここではツォンカパの思想が研究対象であるが、その研究対象がいかなるものであらうとも、伝統的な考え方を踏まえ

ながらも、つねに批判的な、すなわち理性的な立場で望むことが必要であるということである。

なお本書には七項目からなる詳細な索引が付けられている。それは読者、ことに佛教を原典を通して学ぶ者にとってきわめて有益である。評者等もそれを範としたい。

#### 略号・使用文献

GR *dBu ma dGongs pa rab gsal* 『密意解明』

小川一乗 『空性思想の研究Ⅱ』(第二部)、文栄堂、一九八八年。

LN *Legs bsdai shin po* 『善説心髓』

片野道雄／ツルティム・ケサン 『中観哲学の研究Ⅱ』 文栄堂、一九九八年。

LR *Lam rin chen mo* 『道次第大論』

長尾雅人 『西藏佛教研究』 岩波書店、一九五四年。

LRGN *Lam rin chun nu* 『道次第略論』

ツルティム・ケサン／高田順仁 『中観哲学の研究Ⅰ』 文栄堂、一九九六年。

ZR *sTog's rin chen mo* 『真言道次第大論』

高田仁覺 『インド・チベット真言密教の研究』 高野山大学、一九七八年。

(ZRのみラサ版、他はタシルンポ版を用いる。)

#### 註

③ チベット語のローマ字表記の方法には、ワイリー方式、ダス方式、イエシュケ方式等があり、評者はワイリー方式を用いるのを通例とするが、ここでは『チベット仏教哲学』に用いられる転写方式にしたがって表記する。それは基本的にはダス方式である。

- ① 本書二九七頁。LR, pa. 349b5-6. 長尾訳二二四頁。Cf. LN, pha. 465d-5. 片野／ツルティム 訳一九頁。LRcN, pha. 181a4-5, 189a5-6. ツルティム／高田訳五一、七五頁。
- ② 本書一八〇頁。GR, ma. 139a1-5. 小川訳二二二、四二五頁。
- ③ 本書には袴谷憲昭博士による書評〔駒沢短期大学佛教論集〕第四号、一九九八年一〇月〕があり、概ね本書の主張に沿った内容概略と、本書を読む上での有益な情報が与えられている。この書評については、ツルティム先生を介して、小谷信千代先生から教えていただきましたこと感謝いたします。
- ④ たとえば、サキャ・パンディタ (1182-1251)、『レンダワ (1349-1412) には学説Bは説かれな。本書一九〇頁註(33)』一八五頁。
- ⑤ 本書一六五頁。LR, pa. 371b2. 長尾訳一六五頁。
- ⑥ 本書三三〇頁。GR, ma. 88a1-3. 小川訳三三、三六六頁。
- ⑦ 本書三三〇頁。GR, ma. 85b4-5. 小川訳三三、三六三頁。
- ⑧ 本書三三七頁。LR, pa. 369b4-6. 長尾訳一六二頁。
- ⑨ 本書三三八頁。LR, pa. 374a4-b1. 長尾訳一七〇頁。
- ⑩ 前註⑧に同じ。
- ⑪ 前註⑨に同じ。
- ⑫ 本書三三六頁。LR, pa. 368a1. 長尾訳一五九頁。
- ⑬ 本書二四二頁。LN, pha. 62a4. 片野／ツルティム 訳七三頁。
- ⑭ 本書一七九、二六四頁。LN, pha. 86b6-87a2. 片野／ツルティム 訳四五頁。Cf. LR, pa. 425a5-b5. 長尾訳二二二頁。
- ⑮ 「絶対否定の空性は、真の勝義の真実である」という説が、そのままの形で、ツォンカバの著作の中には見出されるかどうかは、確認できない(本書一六二頁)、とされるが、少なくとも、『道次第略論』における「勝義諦とは否定の基盤である有法において、ただ諦が否定されていることのみとして規定するからであり」(LRcN, pha. 198b6. ツルティム／高田訳一〇五頁)、『諦が排除されていることのみの空性「すなわち」勝義諦」(LRcN, pha. 205b6. ツルティム／高田訳二二七頁)等が注意される。
- ⑯ 本書一六一、二〇九、二八八頁。LR, pa. 386a4-6. 長尾訳一九三頁。
- ⑰ 本書二〇七頁。
- ⑱ 本書三〇一―三〇三頁。LR, pa. 410a2-6. 長尾訳二四一―二四二頁。
- ⑲ 本書三〇一―三〇二頁。LR, pa. 407a2-b4. 長尾訳三三三―三三七頁。
- ⑳ 本書三三三頁。
- ㉑ GR, ma. 122b3-4, 252b6-253a1. 小川訳九四、三三〇、四〇九、五五四頁。LRcN, pha. 204b3-205a2. ツルティム／高田訳二二二―二二五頁。
- ㉒ 本書一六四、二二〇頁。
- ㉓ LRcN, pha. 205b3-4. ツルティム／高田訳二二七頁。
- ㉔ 本書三三七頁。
- ㉕ LN, pha. 113b6-144a3. 片野／ツルティム 訳二二九頁。Cf. 本書三三三頁。
- ㉖ 桂紹隆『インド人の論理学』中央公論社、一九九八年、一六二頁。Cf. 本書三二五頁。
- ㉗ 本書三二五―三二六頁。
- ㉘ たとえば、『善説心髓』は「湖における煙の無」を絶対否定の一例として言及される。LN, pha. 115b4-116a1. 片野／ツルティム 訳三三五頁。
- ㉙ 松本史朗『縁起と空 如来蔵思想批判』大蔵出版、一九八九年、同『禪思想の批判的研究』大蔵出版、一九九四年。
- ㉚ 長尾訳三九七頁。Cf. LRcN, pha. 218a4-5. ツルティム／高田訳

一六五頁。

③① NR, ga, 32b2-4. 高田仁覺訳一七四頁。

③② GR, ma, 254a5-6. 小川訳三三二—三三三、五五六頁、LRcN, pha, 191a6-191b2. ツルティム／高田訳八一頁。ゲルク派の如来蔵思想理解については、ツルティム「一乗思想と如来蔵思想について」『関西大学東西学術研究所紀要』第二十六号、一九九三年を参照(51)。

③③ Cf. LRcN, pha, 206b6. ツルティム／高田訳一三二頁。

(一九九七年一月、大蔵出版刊、まえがき・目次・

略号・使用テキスト xv 頁、本文・初出一覧・チベッ

ト仏教史年表・索引計四四六頁、定価七〇〇円)